音楽を愛好する心情を育てるチェコの音楽教育について

前プラハ日本人学校　教諭
岐阜県関市立旭ヶ丘小学校　教諭　上　村　光　代

キーワード：音楽の都プラハ，合唱団，音楽の授業，クラッシック音楽，オペラ

１．はじめに

チェコに来て，日本との大きな違いを感じたのは，チェコの人々の音楽に対する思い入れの深さだ。街では毎日のようにコンサートが開かれ，オペラやバレエも人々にとって身近なものである。「今年の『プラハの春』の通しプログラムを手に入れて，観に行きたい演目に印をつけたら５つほどになったわ。」「冬のクリスマスシーズンには毎年『くるみ割り人形』を観に行くのが我が家の恒例行事なのよ。」「スメタナの『売られた花嫁』はもう４回ほど観たかしら。」という声を聞くほどである。クラッシックにかぎらずジャズ，フォルクローレなど，街や通りには音楽があふれ，幅広い分野の音楽を気軽に楽しむ土壌がチェコの人々の中に確立されている。

大人だけではなく，子どももそうだ。児童合唱団の発表をいくつか聞いたが，どの歌声もきれいな頭声発声で力まずに響きをていねいに作り出し，難しい和声の重なりも完ぺきに歌いこなすほどの実力の高さだ。また，下校時刻が日本の学校より早いチェコでは，帰宅後，芸術基礎学校に通い，音楽を学ぶ児童も少なくない。

音楽に対するこの意識，そしてその質の高さ，そして何より音楽を愛好するチェコの人々の多さを目の当たりにしたときに，日本との違いを痛感した。足繁くコンサートホールに通う人々，義務教育を終えた後も音楽の魅力に惹かれ，音楽と関わり続ける人々，そして，その音楽を次世代へつなごうと積極的に音楽教育活動を行う人々の姿にひかれ，チェコの音楽教育について調べていくこととした。

２．児童合唱団における音楽指導のあり方

１年目は，合唱団における音楽指導のあり方について調べた。どうやったらあの天使の歌声が作り出されるのか，実際に見学させていただく中でチェコならではの指導のあり方が見えてきた。それを３点紹介したい。

(1) 児童合唱団編成員の幅の広さ

私が見学させていただいたクラドノ児童合唱団は，「低学年の部」「高学年の部」「中学・高等部」というように３つに分けられており，各部に30名ほどのメンバーが在籍し，それぞれに担当が付いて指導していた。私は，日本でこのように年齢層の広い合唱団を見たことがない。この効果について，次の２点が挙げられる。

①低年齢児からの発達の段階に応じた指導

頭声発声は強要されず，自然な発声で身体でリズムをとって楽しく歌う経験を多くこなす中で，音楽は楽しいものだというものを存分に体感することができる。

②成長に伴う声質の変化への見通しやあこがれ

子どもたちはこれから自分たちの歌声がどう変わるかをつかむことができる。上級生にあこがれを持つことで，より質の高い歌声に近づけることができる。

コンサートでもリコーダー使用

(2) 身近な楽器を活用した練習方法の工夫

日本では，合唱練習をするとき，鍵盤楽器やＣＤをよく活用した。この合唱団は，正確に音程を取るために，子どもたちにとって身近な楽器であるリコーダーを活用していた。それにより，下記の４つ

の効果を挙げることができる。

①高価な楽器や機材・電源等を用意する必要がないため，場所や時を選ばず，音程を覚えることができる。

②リコーダー練習をすることで，自然に音程を正確に覚えることができ，またそうして覚えた音感は他の曲でも効果的である。

③リコーダーのブレスが，歌うときのブレスと同じであり，一定の息を保って息を送り出すことで，腹筋も鍛えられ，歌声が安定する。

④リコーダーを吹くときは，「心の中でうたいながら吹くこと」が大切とされており，それが歌唱での豊かな曲想表現につながる。

(3) 恵まれた環境

チェコの人々の音楽的能力が高いのは，環境による影響も大きい。チェコの人々は宗教音楽の和声の美しさを知っている。耳が肥えているのだ。だからこそ，あれだけ難しい音程や和声であっても，心地よい音として表現することができるのだと思う。

また，指導者の質の高さも挙げられる。子どもたちの発表の幕間に，指導者の何人かがオペラアリアを発表した。これだけの歌唱力を持った先生方から直接指導を受けるわけだから，なるほど子どもたちの質が高いわけだと納得した。そして，彼らが大人になりまた指導者に・・・という素晴らしいサイクルへとつながるのだ。

先生の周りに集まって歌う様子

３．公立学校における音楽教育のあり方

２年目は公立学校における音楽教育のあり方について調査を行うために，ヴェリヒ校５年生のクシヴァヘッツ教諭の音楽の授業を参観させていただいた。

(1) 授業の流れについて

始まりのあいさつがあるわけでもなく，先生の座るピアノの周りに児童は自由に座るという自由な感じで授業が始まった。そして，各自持っている歌集を活用しながら先生のピアノ伴奏に合わせて，どんどん歌を歌っていくという展開だった。中には，歌うことに意欲的ではなかったり，あくびをしたりする児童も見られたが，だからといって，そういった児童が音楽を楽しんでいる周りの児童達たちへ迷惑をかけるといったことはなかった。先生も意欲が低い児童に対して，頑張ることを強要しない。自由な雰囲気の中で，音楽を楽しむ場が確保されていることを実感した。「これだけは教えなければならない」というあせりのようなものを感じながら授業を進める私の音楽授業に対する構えとの違いに愕然とした。

(2) 教師の音楽的な質の高さについて

１時間，ただひたすら歌うという非常にシンプルな授業構成で授業が成立するということは，やはり教師の音楽的な力量の高さがあるからこそだと思う。教師の伴奏で音楽の授業が成り立っていた。子どもとの呼吸の合わせ方，強弱や速さに対する教師の感性の豊かさ，拍の取り方が言葉ではなく教師の伴奏で指導できていた。つまり，音で指導をしていたのだ。子どもたちは，音楽が変わるごとに表情も変わり，曲想もつかみ・・・と教師の伴奏に合わせて歌う中で，多くの音楽的な要素を学ぶことができていた。これも，しゃべりすぎてしまう私にとって，自分の指導法を大きく振り返るよい機会となった。

４．生涯学習としての音楽教育のあり方

３年目は，生涯学習としての音楽教育のあり方について学ぶために，私自身が地域の合唱団に所属し，ズデニック氏より合唱の指導を受けた。

(1) 基礎練習の充実

発声練習に要する時間は30分。つまり，練習時間の半分に値する。しかも，座ったままで，楽な姿勢で行うのである。発声練習は１つ１つが短く，いろんなヴァリエーションをこなすので，飽きることはない。どんどん音が上がっていく先生のピアノの音に気持ちよく乗っかって声が出てくる感じだ。

(2) 年齢層の幅の広さ

合唱団の構成メンバーは，若者も年配者も男性も女性もということで，大変幅が広い。聞けば，子どもの頃からズデニック先生に合唱を教わり，そのまま成人しても合唱部に入っているという方も少なくない。このスパンの長さにおどろいた。

(3) 先生の質の高さ

ズデニック氏はオペラ歌手でもあり，今なお現役としてステージに立つほどで，その歌声は本当に素晴らしい。指導の声だけでも聞き惚れるほどである。先生の伴奏も即興で作られ，先生からあふれ出る音楽の深さに，生徒は皆魅了されている。先生から質の高い指導を受けられることが，音楽を学ぶ喜びにつながっている。

５．チェコの音楽事情

もちろん，ヨーロッパの中央に位置するチェコ共和国だからこその文化的な土壌，そしてそこで形成された豊かな音楽環境がある。

(1) 本格的な音楽劇場

プラハにはモーツァルトゆかりのエステート劇場，国民の力で建設された国民劇場，そしてチェコを代表する作曲家の名がついたスメタナホール，ドボジャーク（ドボルザーク）ホールと，一歩足を踏み入れただけで圧巻のコンサート会場が多くある。コンサートへは，大人も子どもも正装し，幕間にはワインや軽食をつまむような社交の場もあり，19世紀にタイムスリップしたかのような錯覚に陥るほどである。純粋に音楽を楽しむ場の中に身を置くことの心地よさを体感することができるのである。

(2) チケット代の安さ

例えば，スメタナのオペラ「売られた花嫁」は，夜だけでなく，子どもたちに多く観てもらいたいと昼間にも上演されており，料金は上のバルコニー席で170kc（850円）だ。キャストである声楽家たちはもちろん，50名近くのオーケストラメンバー，大がかりな舞台や美しい衣装担当，村人役にはダンス担当のバレリーナも登場するにもかかわらずである。こうした子どもたち向けのコンサート（昼間開催，低料金）は，オペラのみならずバレエやクラッシックコンサートにおいても開催されている。つまり，子どもの頃から本物にふれる機会が多いのだ。また，夜に上演されるオペラ等のチケット代も数千円（例　エステート劇場：「魔笛」上のバルコニー席2000円）と，日本とは比べ物にならないほど安く，誰もが本物の音楽にふれることのできる機会の多さをうらやましく思った。

６．まとめ

チェコの児童合唱団，小学校での音楽の授業，成人合唱団，そしてプラハという街を通して，チェコの人々が音楽といかに深く関わっているかを実感した。音楽は「生涯を通して楽しむもの」そして，「誰もが楽しめるもの」なのである。「モーツァルトが愛したプラハ」「スメタナが音楽で表現したチェコ民族の誇り」という深い歴史の中で育まれてきた音楽は，これほどまでにチェコの人々に浸透しているのである。

これを今すぐ日本に求めるのは無理ではあるが，それでも本物の音楽にふれることの大切さ，そしてそのために自分自身も音楽教育を追究し，自身の資質向上を目指していくことの重要性を強く感じている。音楽を愛好する児童の育成が，次世代の音楽教育の広がりにつながることに気づいた今，日々の音楽指導に情熱を持って取り組んでいきたい。こちらで学んだ音楽教育の指導法を積極的に取り入れ，今後の実践に生かしていきたい。